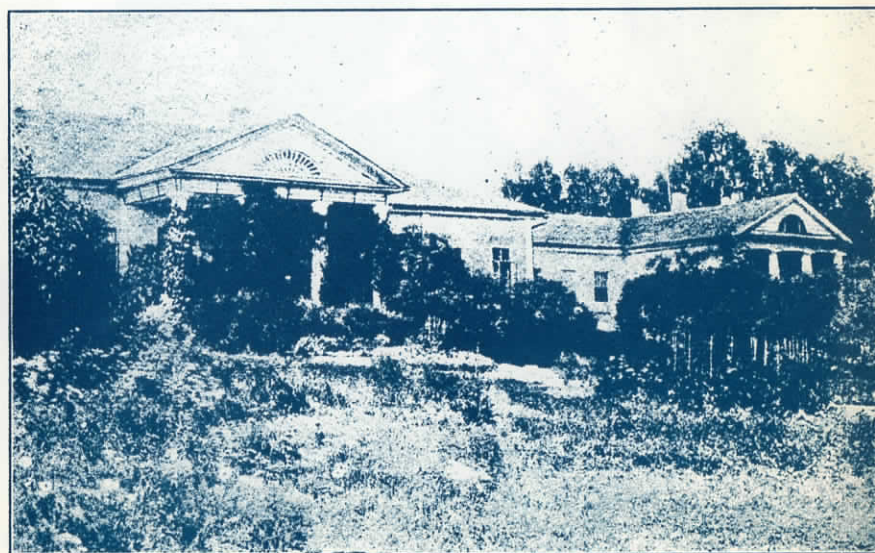




バクーニンの父(1824年)



バクーニンの母(撮影年不明)



ブREMヒノにあるバクーニンの生家

信念は理論によって形づくられ
行動は手本によって示めされる

—ヘルツェン—

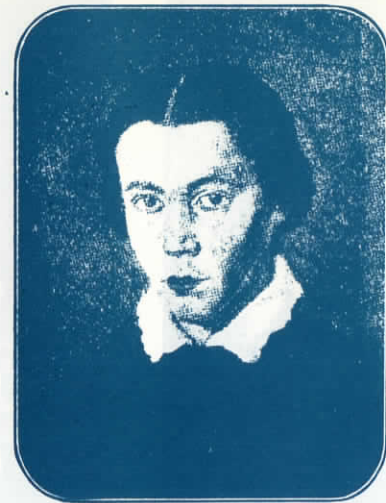


バクーニンと友人達(ナポリ・1866年6月)

正面バクーニンの右側ジュセッペファネリ(スペインで、
インターナショナルを創設)

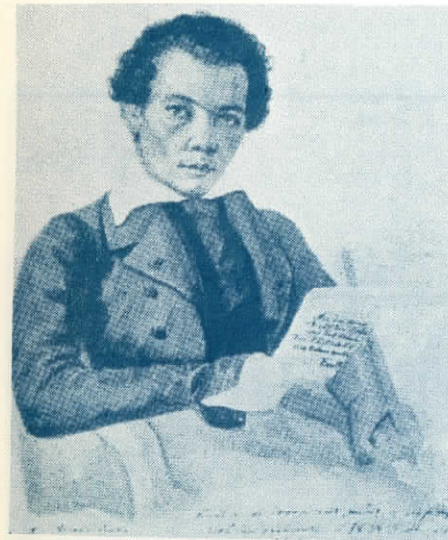


妻アントニーナとバクーニン



バクーニンの妹 タチアーナ(1815～1871年)

四人の妹達のうち、バクーニンが精神的に親愛した妹。



若い日のバクーニン

「メタリヤとアレクサンドラへ。私が未完成であるように、私の肖像も未完成である」手に持った紙片には、ドイツ語で、「愛も生活も、日毎にこれを闘い取ってこそ、これを享受するに価する人間といえるのだ。『ファウスト、第2部』とあるが、正しくは、「自由も生活も……」である。(『ファウスト』第2部相良訳、11575)である。



バクーニン像 フローレンスで(1864年)

gehört zu haben, glaube, & den Schützigen
zu werden, wenn ich, wenn ich, wenn ich
oder zum Werkzeug irgend jemand gemacht
werden hier.

Muz, 7 Sept 1872 Maria Maria Maria

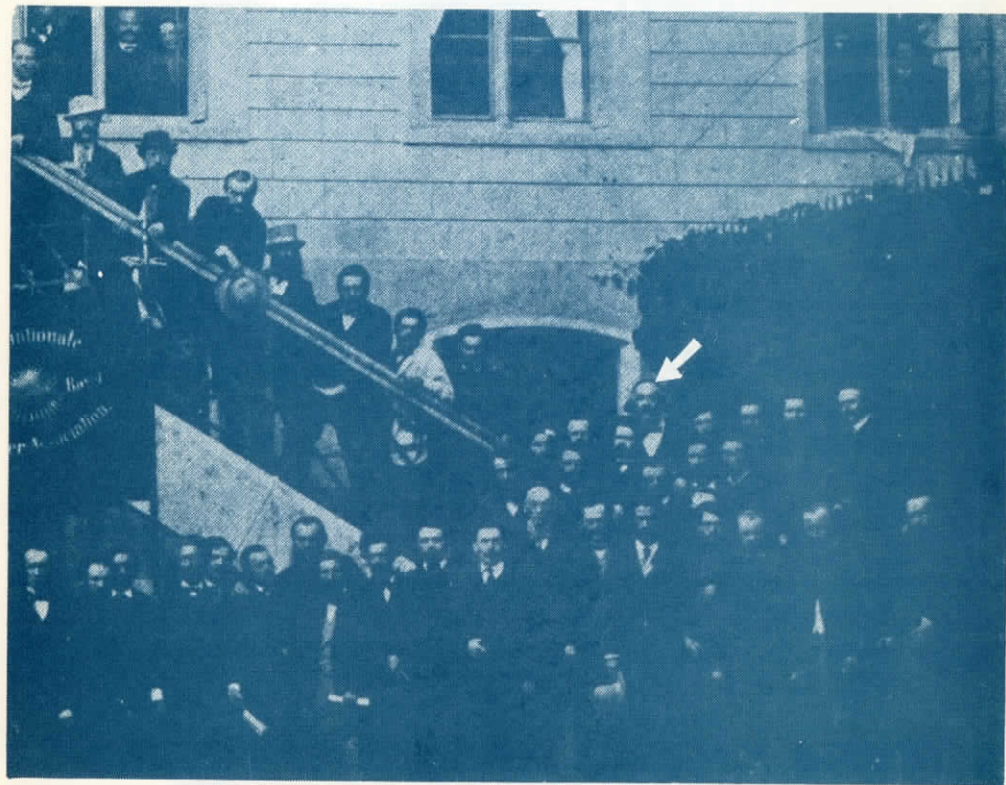
Es stimmen für die Abstimmung

von Bakunin, von Justiz, von Schützigen

J. M. Becker	do	do	do
J. v. G. G. G.	do	do	do
G. G. G.	do	do	do
G. G. G.	do	do	do
G. G. G.	do	do	do
G. G. G.	do	do	do
G. G. G.	do	do	do
G. G. G.	do	do	do
G. G. G.	do	do	do
G. G. G.	do	do	do

バクーニン 追放に署名した人びとの名簿

Justiz	do	do	do
Justiz	do	do	do
Justiz	do	do	do
Justiz	do	do	do
Justiz	do	do	do
Justiz	do	do	do
Justiz	do	do	do
Justiz	do	do	do
Justiz	do	do	do
Justiz	do	do	do



バーゼル会議に出席したバクーニン (1869年)

LIVRET

N°

M. Schützigen, Adressé
âgé de 25 ans, né à Lenzbourg

profession ouvrier
admis dans la section de l'Alliance

le 4 Octobre 1869
sous le n° du contrôle.

Délivré à Genève, le 2 Octobre 1869

Le Président,
M. O. O. O.

Le Trésorier,
Schützigen
Le Titulaire,
Schützigen

Aus dem Mitgliedsbuch der Genfer Alliance, das dem bekannten
Internationalisten aus dem Jura, Adressat Schützigen, gehörte. Die
Unterschriften sind von M. Bakunine, Fritz Heng und Schützigen.

ジュネーブ同盟部会の会員証

ASSOCIATION

INTERNATIONALE

DES TRAVAILLEURS

Règlement du Bureau de Paris.

Admissions.

ARTICLE PREMIER. — Pour être admis, il faut
justifier de sa qualité de travailleur.

ART. 2. — Toute admission est définitive
après trois mois, si l'adhérent n'a pas reçu avis
contraire de la Commission.

ART. 3. — En cas de non-admission, toutes
les sommes versées par l'adhérent lui seront
remboursées intégralement.

AIT (国際労働者協会) 規約の第1頁



演説するバクーニン

バーゼル会議のスペイン代表の一人、
ラファエル・ファルグ・ベリセル描

Aus der anarchistischen Bewegung in Japan

Dem FANAL geht ein Bericht aus Japan zu, der über den Stand der anarchistischen Bewegung dort Aufschluß gibt. Zur Zeit geben die japanischen Genossen 7 größere Zeitschriften heraus, kleineren mit lokalem Charakter Fünf.

臺本獨、佛、西、露各國語版全集の照合
編輯 各國全集に洩れたる稀覯文獻の網羅
譯者 アナキズム理論に通曉せる篤學新進
贊助 海外バクーニン諸學者の絶對的支持
出版 消費組合式出版方法の劃期的大全集

バクーニン全集

卷七全

預約募集
定價各冊
金八拾錢

「社会思想」
大正14年2月号

新たにバクーニンの手紙

石濱知行

「バクーニンは多くの罪を犯した。しかしすべて彼の缺點に打撃つてある。それは彼の精神の奥底に潜む、永久に生ずる所の主義である。」——ピョートル・シキリ

譯者 前記(一)

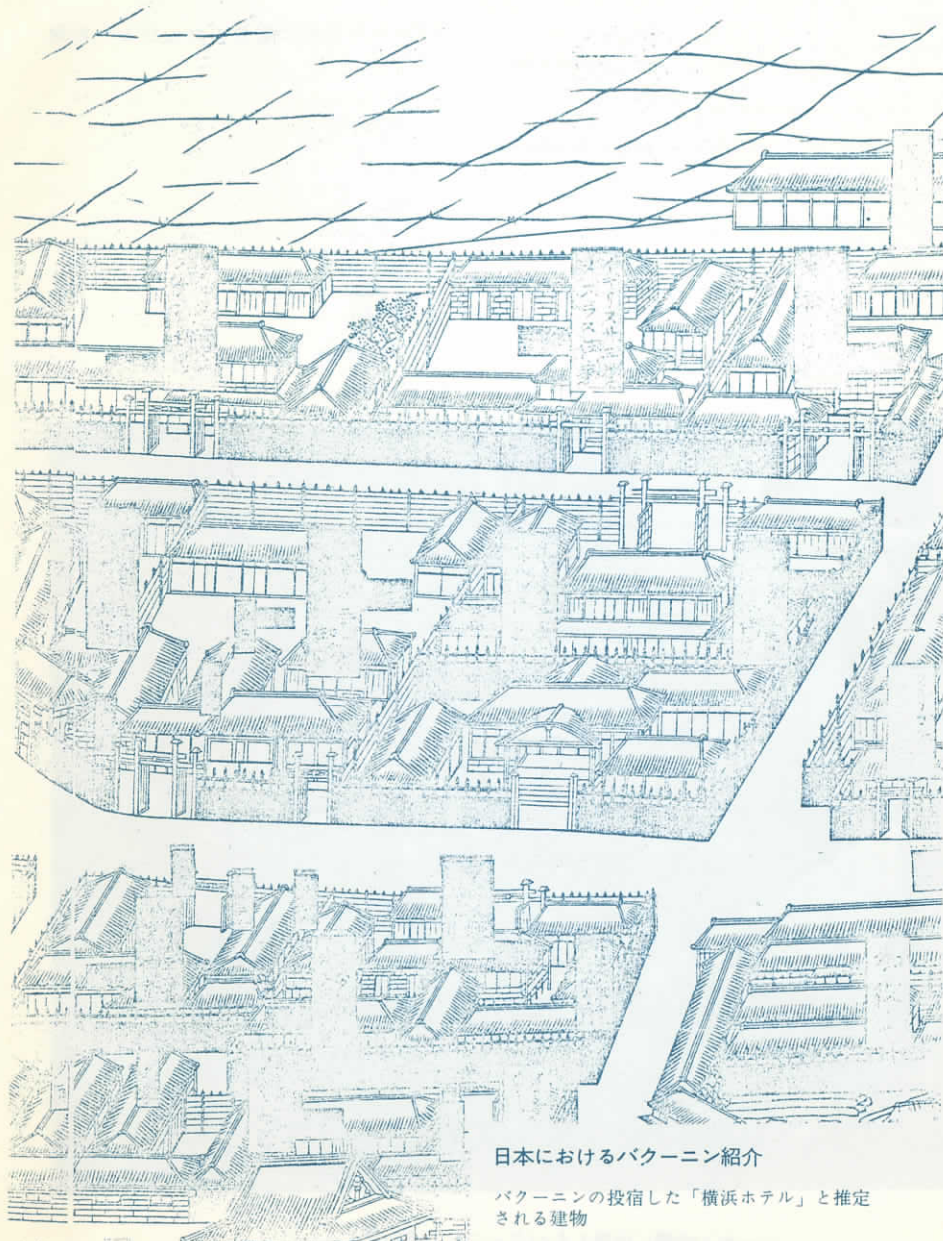
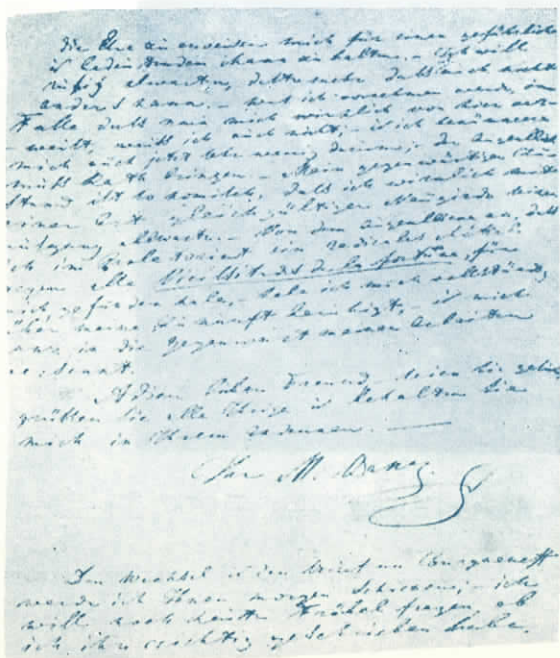
憂鬱と孤獨と貧窮との放浪の生涯は、今まで多くの社會運動家に通病で作り上げた理論以外に、力強き血と熱と人類社會に對する深き洞察とを與へた。マルクス、エングルス、クロポトキン、リプキン、レーニン、トロツキー等の自ら書いた或は他人の著した傳記或は放浪記を讀むものは、彼等の生涯の大部分が放浪の生活であつた事及びこれらの放浪が彼等の思想や理論に如何に大なる人類生活の體験を與へたかを知るであらう。

一八四四年五月四日、ロシアのトルエ地方のブレムニナ村(Premuchino)に生れ、研學の志を、

「ファナール」

入りてより、

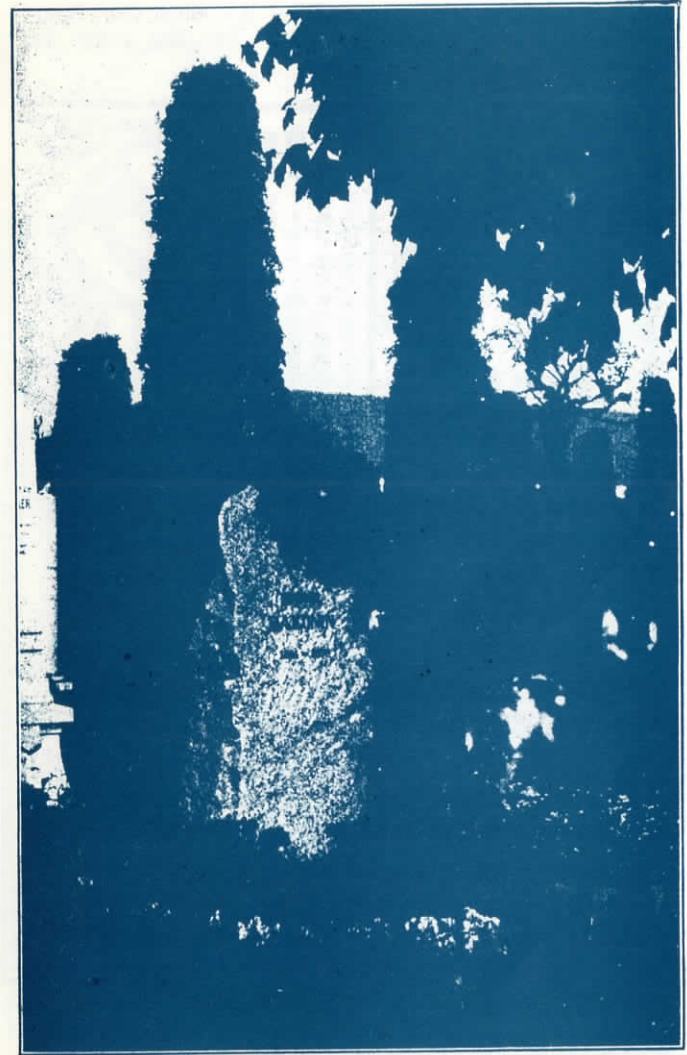
「ファナール」



日本におけるバクーニン紹介

バクーニンの投宿した「横浜ホテル」と推定される建物

玉蘭齋貞秀「横浜外国人住宅細見」より。
(神奈川県立文化資料館所蔵・同館の転載許可済)



ベルンにあるバクーニンの墓

I

バクーニン死後一〇〇年

詩 われらのバクーニン

F・エルター

彼は一人の人間であり一人の英雄であった
臆することなく毅然として全世界に歩を進め
自由と光明に向け

われらをいばらの道へと導いた

支配者どもは彼のこぶしを追い求めた

だが彼は自分の説いたままに生きていた――

あたかも嵐が荒れ狂うかのごとく

今なお彼の歩みによって大地は震えるのだ

言葉で、身をもって、思想で、行動で

彼は神を拒絶し、国家をも拒絶した

蜂起の旗がひるがえるところ

彼はその戦場に姿を現わし

その最前線に身を投じた

自由の広場、激動する闘争
そこが彼の拠点であり故郷であった
彼、「世界の叛逆者」はそこに屹立していた

純粹の魂をもち、いささかのくもりもなく
彼は民衆の幸福を望んでいた

民衆を暴圧する迷妄を
言葉により、著述によって
とり除こうとしていた
生命をあやうく圧殺しそうな
すべての頑固な限界は
彼の激烈な思考のまえに瓦解する

この世界の貴族どもはみな
一人の叛逆者によって激しく糾弾される
ために彼もまた迫害されつづけ
仇敵どもは彼を法廷へ

ひきずりだすために結託した
かつての友人たち、彼らすらも

I
1900年

F・H・スティー

虐殺者からのがれ得た彼を
ぬかりなく不名誉に中傷していた

生を得て帰還し、民衆の正義のために
彼は旺盛になお苦闘した
臨終のまぎわまで

光明をもたらしていた
いつの日にか彼の思想は勝利しよう
だからこそ彼の著述から
力を、勇気を強さを吸収しよう
われらを苦悩から解放するため

M・ネットラウ編『われらのバクーニン』
ベルリン、一九二六年、三ページより
(梅田順子訳)

M・ネットラウ

バクーニンの小説

バクーニン小伝

ミハイル・バクーニン（一八一四—一八七六）——アナキスト、思想家、プロバガンディスト。彼は一八世紀のリベラルな教養をもったロシア貴族の息子で、モスクワとベルリンの諸大学で哲学を研究するために若くして軍歴を放棄した。一八四一—四六年、彼はアーノルド・ルーゲの急進的なヘーゲル主義、フォイエールバハの哲学的ヒューマニズム、ならびにワイトリングの共産主義、初期のマルクス主義、ブルードンのアナキズムの影響を大いに受けた。一八四七—六三年の時期をカパーする次の段階の経歴において彼の心をとらえたものは、民衆の解放を達成しようとする企図するさまざまなスラヴ諸民族の反ジューリズム連合という計画であった。彼は一八四九年のドレスデン蜂起にまき込まれ、サクソン政府から死刑を宣告され、オーストリア政府に引き渡され、最後にロシア官憲の手中に落ち、要塞の地下牢に投獄され、シベリアに流刑されたが、一八六一年にはそこを脱出した。イタリヤへ行ってバクーニンは一八六四年に、後に社会民

個人的な諸記録、回顧録、官憲記録（このなかにはロジヤで投獄されている間にバクーニンの作製した「告白」を含む）が利用できる、ほとんどすべてのデテールや論議された諸論点に一掃されている。

近年の研究が明らかにすることによると、バクーニンは幅広い、不朽の影響をもつ思想家であった。その思想の中心的な諸要素はすべての分野——知的、政治的、社会的、道徳的——における完全な自由に対する熱望であり、人間の生来的な連帯に対する信念であった。最初に彼はこの理想の実現を宗教的な熱情で神との精神的な合一のなかに求めていた。後に、彼は哲学的な啓蒙にもとづく人間の同胞性という理想に転じた。四〇代以降、彼の目的が達成できるのは現在の社会的政治的体制を、そしてその体制が維持する心性を完全に破壊することによって、「連合主義、社会主義、反神学主義」、すなわち後年のフレイズにすると「アナキズム、集産主義、無神論」に代置することによってのみ可能である、と彼は感じていた。バクーニンによると、破壊される国家に代

M・ネットラウ

万国同盟として知られる秘密の国際同胞団を組織した。これはイタリヤ、スペイン、ロシア、ジュラ連盟を通じてスイスで支持者を集めた。一八六八年、彼は第一インタナショナルに加入したが、マルクスの支持者や稳健派はバクーニンの革命的な諸思想に反対し、ときどき彼の性格？は信用できないと表明していた。インタナショナルが分裂した（一八七二年）後に、バクーニン主義者たちは分離組織として継続していた。バクーニンは失敗に終わったボローニヤ蜂起の後、一八七四年に運動から退いた。

バクーニンの強烈な個性は、両親の權威に反逆した家庭でまず展開し、後に急進的な青年社会で展開した。戦闘的な活動主義の諸個人と彼とを接触させる彼の波乱に富んだ経歴は若い頃の特性をいっそう強化させた。全生涯を通じ、彼は多くの論争の中心であったが、その論争のなかには彼の人格的な廉直を疑問視するものさえあった。しかしながら、現在では同時代人のきわめて多くの

わって生起するのは、脱退の権利を保持する自治的な統合体の自由連合であろう。新しい体制は完全な人格的な自由を保証し、誰もが宗教とは関係ない自由な教育と自分の労働の全生産物を享受する平等の機会を提供するであろう。この変革は調整センターをもつ小さな秘密の集団によって教示され着手される全般的な反抗によって達成されるであろう。自分の人格の純粹な力によって小さなサークルをいつも支配できたバクーニンが気づかなかったのは、この最後の宿題は彼には生得的なアジテーションという方法の合理化であって、他人の自由を尊重することに欠けるといふ批判をうけやすいということである。しかしながら、実際には、それのおかげで初めてアナキズムの組織的なプロバガンダが確立されたのであった。

E・R・セリグマン編『社会科学、エ
ンサイクロペディア』第二巻（ニュー
ヨーク・一九三〇年）より。但し、参
考文献リストは割愛。（若山健二訳）

バクーニンの臨終

A・ライヒェル

……バクーニンが、ルガノからひどく骨の折れる旅の後に当地へ到着したのは六月一日、水曜日の晩でした。彼を待っていたフォークト氏（バクーニンの古くからの友人、医者であるアドルフ・フォークト教授）は彼をすぐに私の家のそばにある病院へ入れました。

……フォークト氏は「バクーニン、君は生活を規則正しくしなければいけないよ」と言ったのですが、バクーニンはこう答えたものです。「なんだって、私の生活はいつも不規則だった。あの男は生きているときは異常だったが、死ぬときは人並だった、と私は言われるべきかね」。

……次の日の一五日、手術が行なわれました。

……彼はショーペンハウアーの『意志と表象としての世界』を読みたがっていました。私たちはそれについて語ったのですが、彼が次のように指摘したのは全く正当です。現代の哲学者はすべて、集団性に属する存在としてではなく個体としての人間よりいつでもはじめることに

よって、誤った原則から出発する。だから、哲学者の最大の誤謬は砂上に楼閣を築く、あるいはショーペンハウアーやハルトマンのようにベシミズムにおちいることである。……

二一日の水曜日、私たちはなおかなり自由に話をし、共同生活（一八四三—四七年）や年来の知己について多くのことを想起しました。私が「バクーニン、君に回想録を執筆する時間がなかったのは、やはり残念だ」と言うと、彼の答はこうでした。「誰のためにそれを書くべきなのかね。とやかく言うに値いしない。今日、すべての国々の民衆は革命的本能を喪失してしまった。彼らはすべてあまりにも現状に満足しており、自分の持っているものをもなお失なうという恐怖のために無害で怠惰になっている。とんでもないことだ、私がいくらか健康をとりもどしたら、哲学的宗教的冗句のない集産主義的原理にもとづく倫理学を執筆したい」。

……二六日、月曜日、晩に私は彼と音楽についてなお話

をしました。彼は私に、ベートーベンがフーガも作曲したかどうか、尋ねましたが、私がフーガを作曲したとき、私もそのことを考えたものです。彼はかなり興味をもって私の説明の筋道をたどっていました。それから私たちは近代音楽について語り、作曲家ワグナーについて彼は自分の意見を述べました。バクーニンはワグナーの音楽についてもその性格についても、非常に正當に評価していました。……

……二八日、水曜日、私はフォークト氏と話をしましたが、彼が言うには、病気は悪い方向へ進んでおり、回復の見込みはない。……私がバクーニンにスープを飲むようにすすめると、彼は眼をあげることなく、「私は何もいらない、私は自分の仕事をきちんとやり終えた」と言いました。……

……七月一日、土曜日、朝の九時頃、私が彼を見た最後でした。彼の様子はほとんど変わっておりませんでした。私の妻が十時頃に見かけたときはもっと安静で、顔色ももっとすくれていました。一時頃、フォークト氏がおとずれ、一二時四十分前、彼は最後の息をひきとりました。彼に死の苦しみはなかったと言えましょう。最後の二日間、彼はほとんど眠り、非常に騒がしく呼吸をしていたのですが、苦しそうな表情はほとんど顔には現われませ

んでした。ときどき、彼は瞬間的にがまんしきれなくなるらしく、そのときには顔をゆがめ、「ちくしょう」と言っておりまして。ですけれども、大体において彼はますます永眠の途についたようです。……

死の一時間後、彼の身体は清められ、着物を着せられましたが、彼の顔だちの美しいことに私は感動しました。そこには荘厳な静寂がただよっていたのです。……

※ ※ ※

右の文章はバクーニンの最後を伝えるA・ライヒェルのO・ガンブッチ宛の書簡の抜萃である。日付は一八七六年七月六日。

バクーニンは遺書も遺言ものこさなかったようである。巷間伝えられるバクーニンの臨終の言葉はこの書簡の中に摘記されているものとはやや異なっているが、大意において同一であるからあまり意に介する必要はないであろう。ところが死亡日に関しては異説があるようだ。このライヒェルの書簡では七月一日であり、ほとんどの文献でもそうになっているが、ごくわずかが六月二六日、七月二日、七月六日説がある。誤植とも思えないし、十分な信頼できる著者なのであるが、真実はいずれであらうか。

死の直前、バクーニンが倫理学を執筆したがっていたことに注目したい。この願望が果されなかったのは、クロボトキンがバリコミューンについて詳論しなかったこととあわせ、大いに惜しまれることではある。もっとも、

バクーニンのこの願望はクロボトキンの『倫理学』によって部分的にかなえられたとみることはできないであろうか。(明智泉一郎)

付 記

右の書簡は前出の語と同じく『われらのバクーニン』に収録されている。本書には二種類あるが、私たちの使用したのは「デア・サンジカリスト」版の単行書で、「社会主義、サンジカリズム、アナキズムの歴史論集」第二巻である。いうまでもなくバクーニン死後五〇年の記念文書であって、ほとんどがネットラウの手による論文、バクーニンの著述のドイツ語訳である。なお死亡日の異説として他に七月一四日もあることをつけ加えておく。(若山健二)



バクーニンの伝言 メッセージ

